

私、  
靈感あるんです！

登場人物

・ 八代美香 (26)

・ 秋山斗真 (35)

・ 小野鈴音 (25)

○アパート・リビング  
テレビがついている。

○テレビ画面

女芸人A「私、本当にあざとい女が嫌いなん  
ですよ〜こういうのとか」

女芸人A、アヒル口をする。

他の共演者たち、笑って頷いている。  
突然消えるテレビ画面。

○アパート

リモコンをリビングのテーブルに置く、  
八代美香（26）。

美香の声「部屋が汚い潔癖症女」

美香、寝室でベッドの布団を畳む。

美香の声「計算高い天然女」

洗面所で歯を磨く。

美香の声「こう言う女嫌いなんだよね女もい  
る」

美香、顔を洗う。

美香の声「そうやって自分のアイデンティティとやらを形成するのだ。特に女は」

鏡に映った自分の顔を見つめる。

美香の声「これは悪いことだとは思わない。

なぜなら、私もこの『自称テク』を使って  
いるからだ。私の場合は」

リビングに戻りテーブルの御守りを手に取って見る。

美香の声「そう、一度も幽霊など見たことない自称霊感ある女」

○アパート

スピーカーから音楽が鳴り響くりビング。  
グ。

足踏みをしてエクササイズをしている美香。

玄関の鍵を開ける音に気づき急いでスピーカーのコンセントを抜いて押し入れに隠れる。

○同・押し入れの中

暗闇で蹲り息を潜める美香。

足音が近づいてくる。

近くでピタリと止まる足音。

男の声「あのー、誰かいらっしやいませんか」  
顔を上げる美香。

○アパート

リビングでウロウロ何かを探している

様子の秋山斗真（35）。

ふと背後を振り返る。

美香、ハサミを秋山に向けて立っている。

秋山「あ、どうも」

軽く会釈する秋山。

不審そうにゆっくりとハサミを持った

手を下ろす美香。

美香「だ、誰ですか」

秋山「あーすいません。僕こういう者です」  
美香に名刺を渡す。

名刺には、『霊能者 秋山斗真』と記載されている。

美香「霊能者……」

秋山「はい、この家には霊がいると思われ  
ます。なのでやって参りました」

美香「あの……鍵は……」

秋山「大家さんにお借りしました。お話のわ  
かる方で助かりました」

美香「あ……はあ……」

気まずい雰囲気の二人。

美香「（恐る恐る）あのー……、やっぱりこ  
の家いますよね……」

秋山「と、いいますと？」

美香「私、靈感あるんです」

○同・洗面所

風呂場の扉を開けて覗く秋山。

手に御守りを持って後ろで見ている美  
香。

美香「そこに、なんか……」

秋山「感じますねここ」

美香「ですよね！私も感じます」

美香、付きっばなしのドライヤーのコンセントを見つけて抜く。

秋山、風呂場の扉を閉める。

秋山「見えたりするんですか？」

美香「ああ……たまたま、髪の毛の長い女の人とかが見えたり見えなかったり……」

秋山「結構霊感強いんですね。じゃあ次そっち行きますか」

洗面所を出ようとする秋山。

美香「はい。あ」

風呂場の扉を開ける美香。

美香「（笑って）私お風呂の扉は開けておく派なので。すいません、細かくて」

秋山「あー、なるほど」

### ○同・寝室

室内をグルリと見回す秋山。  
それを見ているだけの美香。

秋山「ここもなんか嫌な感じしますね」

美香「や、やっぱそうですか……」

秋山「どうして成仏できないんでしょうか」

美香「……それって、私に聞いてます？それとも、この部屋の幽霊さんに……」

秋山「どっちもに聞いてます」

ベッドの布団をめくり上げる秋山。

美香「なんででしょうかね……やり残したところがあるとか？」

秋山、カーテンを開けたりめくり上げた  
りする。

美香、ベッドの布団を畳み直す。

秋山「もしそうならそのやり残したことを今、  
全力でやっているのでしょうか」

美香「（不審そうに）さ、さあ……」

向かい合う二人。

秋山「誰かが憎いならその誰かを全力で呪い  
殺すとか、好きだった人がいたならその人  
に全力で思いを伝えようとしているのでし  
ょうか」



美香「ど、どうしたんですか……いきなり」

戸惑う美香。

秋山「いや、靈感のある貴女ならこの疑問に共感して頂けるかとも思いました。それじゃあ次行きましようか」

寝室を出ていく秋山。

不審そうに秋山を見つめ、お守りをぎゅっと握りしめる美香。

○同・押し入れの前

押し入れをじっと見つめる秋山。

後ろで様子を見ている美香。

美香「もしかして……」

秋山「はい。この中ですね。感じませんか？」

美香「あ、いえ……か、感じます」

秋山、勢いよく押し入れの戸を開ける。中にはダンボールや洋服、漫画などが置いてある。

秋山、漫画を手取る。

美香「あ、それ私の大好きな漫画なんです！

笑えるし泣けるしすごい面白いんです  
よ！もう何十回も読んじやいました！」

秋山、美香を見る。

美香「あ、すいません。関係のないことを：  
…」

秋山「いえいえ、関係なくないですよ」

○同・リビング

周りを見渡す秋山。

様子を伺う美香。

秋山「さて、こんな感じですかね」

美香「え、もう終わったんですか？」

秋山「まあ一通りは確認したので」

美香「いや、なんかその…：除霊とか」

秋山「除霊…：ですか」

秋山、美香を見る。

秋山「今この瞬間、この場に霊がいますが見  
えていますか？」

美香「え…：…」

不審そうに秋山を見る美香。

秋山「誰かに取り憑くわけでもなければ、誰

かを助けるわけでもない。霊でいることに  
甘え、生者よりも怠惰な生活を送っている」

美香「……幽霊は他の人間とは違います。甘  
え、喜び、悲しみ、希望……そんなものは  
ない」

秋山「いいえ、僕と貴方はほんの少し違うだ  
けなんです。霊として、人間として全力で」

その瞬間、風が吹きテレビがつきスピ  
ーカーから音楽が流れ照明が点滅する。  
少しして静まり返ったりビング。

美香の姿はなく、床に御守りが落ちて  
いる。

それを拾い上げる秋山。

秋山「全力で生きるのです」

○カフェ・数日前

向かい合って座っている二人。

ソワソワしている小野鈴音（25）。

鈴音「私、靈感あるんです！」

身を乗り出す鈴音。

鈴音「誰もいないはずなのに足踏みするよう  
な音が聞こえたり、布団が勝手に畳まれて  
たり」

男の人の声「他には何かありますか？」

鈴音「あとは、お風呂の扉が勝手に開いたり

コンセントが抜かれてることもあります！」

男の人の声「なるほど」

美香「押し入れから笑い声とかすすり泣く声

も聞こえるんですよ！」

必死に訴えかける鈴音。

秋山「では私が調べましょう」

鈴音の向かいに座っている落ち着いた  
表情の秋山。

完